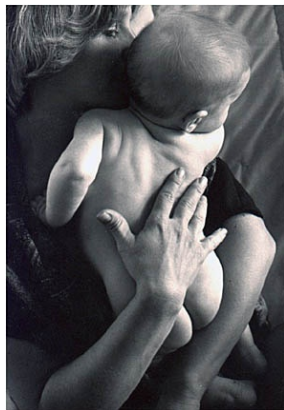


1 週目：自分の歴史から始めよう



34 週の霊的な「旅」を始めるために、まず自分の歴史から出発します。今週の祈りの中心は、神と自分の関係に辿り着くことです。自分の歴史を振り返ってみることによって、神がこれまで自分と関わっていたことに気づき、これらの歴史を 34 週の旅のバックグラウンドとして受けとめます。

いつも口ずさんでいた歌が自分にはあったか？そして、その歌が自分の記憶の中に長い間とどまっていたことに気がきます。今週の旅は、実際にそれと似ています。自分は、毎日の生活を送りながら、心に深く刻み込まれている自分の歴史を改めて思い出し、この歴史こそ自分の人生を形作ってくれたことを受け入れます。

記憶から生み出される自分の歴史を大切にしておきましょう。今週、自分の「写真アルバム」を通り抜けましょう。神ご自身が「自分の歴史」を示してくださるように、自分の最も初期の記憶に戻りましょう。自分はどんな「写真」にとどまりますか？自分の人生において、いつ頃の「場面」を一番強く思い出せますか？その場面において、誰がそれらの場面に現れますか？いくつかの写真は幸福な場面を示してくれるものであり、いくつかの写真は全く悲しいことを示すものです。また、他の写真は思い出したくないほどのものでもあります。しかし、全ての写真に現れてくる自分はこの霊操の位置づけとなるものです。

ゆっくりやってください。ゆっくり行ってください。今週の日々の霊操はこれからの霊操の過程を準備するものであるので、丁寧にしてください。祈りの中で現れてくる自分の歴史をノートやメモに書きとめてください。

毎日の霊操の中で思い出された「自分の歴史」における神の恵みを感謝し、これからも神の恵みに気づくことができるように、その恵みを願ってください。

祈りの要点

*恵み: 神が私をどれほど深く愛してくださっているかを味わう。

第 1~2 日 (イザヤ 43:1-7)

- 神が私を心より大切に思っている、その神の心を味わうように。
- なぜ神は「恐れるな」と言ってくくださるのか(1,5 節)。
- 神と共にいることを経験したことがあるだろうか(2 節)。
- 神の目に私はどのように写っているだろうか(4 節)。

第 3~4 日 (イザヤ 55:1-13)

- 神は私をどこに招こうとしておられるのか(1,2 節)。
- 神の思いはどのようなものだろうか(8,9 節)。
- 神の望みは(11 節)。

第5～6日（ルカ 12：22-32）

- 神は1羽の鳥に心をかけてくださっている(24節)。
- まして神は私のことをどれほど気にかけてくださっているだろうか。
- 私が本当に心がけねばならないことは(31節)。

第7日（反復）

この6日間の黙想の中で、もっと深めてみたい、味わってみたいという点に戻って、それを深めてみる。新しい材料ではなく、一度祈ったことを味わい直してやること。

（英隆一朗、「息吹をうけて」、日々の生活のなかで祈りを深める、10頁）

参考資料

神は自分の生活の中にいらっしゃる

日頃、わたしは神を意識しないで生きています。その結果、神がいつも共にいて下さることを感じないだけでなく、忘れていきます。

危ないのは、わたしの生活の外に神を見つけようとする事です。どこかで、教会で、雲の上でとか。現実から逃避しないように、聖イグナチオはいつも「自分の生活の中で神を見つける」と強調します。わたしの具体的な歴史こそ、神の愛の業、神がわたしと出会いたい場なのです。ありのままの自分。今ここでの自分。

わたしはまるで、神がいなかったかのように一人で自分の生活を考え、一人で戦い、一人で悩んできました。今日は、神を自分の中で見つけたい。聖書で、特に預言者はこのことを訴えています。「彼らは尋ねもしなかった。『主はどこにおられるのか・・・』祭司たちも尋ねなかった。『主はどこにおられるのか』と。(エレミヤ2章4～9参照)」

（イシドロ・リバス、「祈りを深めるために」その1、13～14頁）

他の聖書箇所

ホセア 11:1-9, 詩編 139:1-18